

ペットとの情緒的交流が高齢者の 精神的健康に及ぼす影響

安藤 孝敏

横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ（社会科学）No.10 別刷

Reprinted from
THE SOCIAL SCIENCES
Journal of the Faculty of Education and Human Sciences
Yokohama National University
No.10, FEBRUARY, 2008

ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響

安藤 孝敏*

急速な人口の高齢化にともない、わが国においても高齢者とペットとの関係が注目され、ペットが高齢者の心身の健康に良い影響を及ぼすという報告^{1, 2)}を目にするようになってきた。しかし、これらの多くは事例報告であり、規模の大きな調査研究はごくわずかしかない。他方、欧米では、20年ほど前から社会老年学の新しい研究テーマとしてペットに関する調査研究が行われ、高齢者のペット飼育状況とペット飼育に関連する要因^{3, 4)}、ペットが高齢者の対人関係に及ぼす影響⁵⁾、ペットが高齢者の心身の健康に及ぼす影響^{6~10)}などについて、その成果が蓄積されてきている。

ペットが人の心身の健康に及ぼす影響を検討する研究では、人とペットとの関係性をどのように評価するかが結果を左右する重要な要因であるといわれている。これまでの研究をみると、ペットを飼っているかどうかという単純な質問で評価している研究から、多面的に関係性を把握する尺度を開発して評価している研究まである。安藤・児玉¹¹⁾は、この問題を検討するために、都市部に居住する50~79歳の中高年1,098人を対象に調査を実施し、ペットの有無と抑うつ状態との間には有意な関連が認められなかったが、ペットとの情緒的交流と抑うつ状態の間には有意な関連が認められたと報告している。この結果は、人とペットとの関係性を適切に評価する必要があることを示唆するものであったが、この研究で試作された尺度は十分に検討されたものではなかった。

そこで本研究では、ペットを飼っている都市部の高齢者を対象とした調査データに基づいて、人とペットとの間で取り交わされる情緒的な交流を量的に把握する尺度を新たに作成し、これらの結果をふまえて、ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響について検討することを目的とした。

方 法

1. データ

調査は、ペットを飼っている60~74歳の男女600人を対象とし、郵送法により実施された。調査対象者は調査会社が有する首都圏に居住するモニターのうち、犬もしくは猫を飼っている高齢者であった。調査票は2000年1月7日に調査会社より発送し、返送の期日は1月29日までとした。有効回収数は552であり、有効回収率は92%であった。

2. 調査項目

調査では、基本属性として性、年齢、学歴、配偶関係、同居家族、子ども数、現在職、住居の種類、生活機能を尋ねた。学歴は最終卒業学校を聴取し、標準的な就学年数に換算した。配偶関係は配偶者の有無に変換した。同居家族については、回答者からみた13種の続柄ごとに一緒に暮らしているかどうかを尋ね、その回答から「一人暮らし」「夫婦のみ」といった居住形態に変換した。現在職は、従業上の地位についての回答から、その有無に変換した。生活機能の測定には老研式活動能

*横浜国立大学教育人間科学部 社会ネットワーク講座

力指標¹²⁾を用いた。老研式活動能力指標の得点範囲は0～13点であり、生活機能の自立した者ほど高得点になるように尺度化されている。

社会関係については、浅川ら¹³⁾の研究により高齢者の社会関係を構成する基本的な次元であるとされた情緒的一体感と手段的サポートを用いた。情緒的一体感については、「一緒にいてほっとする」人の数を、手段的サポートについては、「(過去半年間に) ちょっとした用事やお使いをしてくれた」人の数を、それぞれ同居家族、別居子とその家族、きょうだい・親戚、近隣、友人・知人という5種の続柄別に尋ねた。

ペットに関する項目としては、飼っているペットの種類と数、ペットの入手方法、ペットの飼育年数、ペットを主に世話している人、ペットとの情緒的交流を尋ねた。ただし、複数のペットを飼っている場合には、最もかわいがっているペットの種類を尋ね、そのペットについて回答するように求めた。犬については、その飼育場所が家の中か外かを尋ねた。ペットとの情緒的交流については、「ペットと何となく気持ちが通じる」「ペットと一緒にいると、ほっとする」「ペットは私を幸せな気分にしてくれる」「ペットは私のことをよく理解している」「ペットがそばにいないと、さびしいと感じる」「ペットは私を元気づけてくれる」のそれぞれについて、「あてはまらない」から「あてはまる」の4段階評価で回答を求めた。得点はペットとの情緒的な一体感が強くなるほど高得点になるようにした。新たに作成する尺度の妥当性を検討するために、Templerら¹⁴⁾が開発したPet Attitude Scale (PAS) の日本語版¹⁵⁾についても回答を求めた。

精神的健康については、高齢者用抑うつ尺度 (Geriatric Depression Scale: GDS) の短縮版^{16, 17)}とAOK孤独感尺度 (Ando, Osada & Kodama Loneliness Scale: AOKLS) ¹⁸⁾を用いて測定した。GDSは身体的症状に関する項目を含まないので、高齢者の抑うつ状態を過大に評価する危険性が低いとされている。GDS短縮版の得点範囲は0～15点であり、得点が高いほど抑うつ状態が強いことを表す。AOKLSはUCLA孤独感尺度をもとに新たに作成された10項目からなる一次元尺度である。AOKLSの得点範囲は0～10点であり、得点が高いほど孤独感が強いことを表す。

3. 分析

飼っているペットの種類と最もかわいがっているペットの種類についての回答から、高齢者のペット飼育状況を把握した。次に、ペットとの情緒的交流についての6項目への回答から、ペットとの情緒的一体感を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。最後に、ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響について検討した。この分析にあたっては、ペットとの情緒的一体感を独立変数、GDS短縮版、AOKLSを従属変数とする重回帰分析を行った。また、いずれの分析においても、先行研究の分析を参考にして、性、年齢、学歴、配偶者の有無、居住形態、子ども数、現在職の有無、生活機能、情緒的一体感を感じる他者数、手段的サポートの提供者数、ペットを主に世話している人を独立変数に加え、その影響を統制した。分析に投入した変数のうち、性、配偶者の有無、居住形態、現在職の有無、ペットを主に世話している人についてはダミー変数で表し、男性、有配偶者、一人暮らし、現在職あり、回答者本人がペットを主に世話しているに1を与えた。また、情緒的一体感を感じる他者数と手段的サポートの提供者数は5種の続柄の合計人数であった。

結 果

1. 回答者の属性

表1には回答者の属性を示してある。回答者の性別構成は、男性が48.6%、女性が51.4%であった。年齢範囲は60～74歳であり、平均年齢は66.6歳（男性66.6歳、女性66.5歳）であった。年齢階級別の構成は、男女とも60～64歳の若い層（男性36.2%、女性37.7%）が多かった。学歴は、男性で旧制高等学校・新制大学卒業相当以上、女性で旧制中学・新制高等学校卒業相当が最も多かった。配偶者については、男性の90%以上が有配偶であるのに対して、女性は約60%であった。居住形態は、男性では未婚子同居が最も多く、夫婦のみ、既婚子同居の順であった。女性では、既婚子同居が最も多く、夫婦のみ、未婚子同居、一人暮らしの順であった。職業については、男性の約60%以上が有職であるのに対して、女性は約30%であった。住居の種類は、男女とも約90%が持ち家であった。生活機能の平均得点は、男性が11.9点、女性が12.3点であり、男性に比べて女性で高かった。

表1 回答者の属性

		人数 (%)	
		男性 (<i>n</i> =268)	女性 (<i>n</i> =284)
年齢	60～64歳	97 (36.2)	107 (37.7)
	65～69歳	89 (33.2)	95 (33.5)
	70～74歳	82 (30.6)	82 (28.9)
学歴	旧制小学・新制小学卒	57 (21.5)	66 (23.4)
	旧制中学・新制高校卒相当	78 (29.4)	168 (59.6)
	旧制高校・新制大学卒相当以上	130 (49.1)	48 (17.0)
配偶者の有無	あり	243 (90.7)	167 (59.2)
	なし	25 (9.3)	115 (40.8)
居住形態	一人暮らし	5 (1.9)	36 (12.7)
	夫婦のみ	93 (34.7)	72 (25.4)
	未婚子同居	97 (36.2)	67 (23.7)
	既婚子同居	60 (22.4)	95 (33.6)
	その他	13 (4.9)	13 (4.6)
職業の有無	あり	166 (62.2)	84 (29.8)
	なし	101 (37.8)	198 (70.2)
住居の種類	持ち家	244 (91.0)	250 (88.3)
	公営・公社・公団	3 (1.1)	12 (4.2)
	借家	14 (5.2)	8 (2.8)
	マンション・アパート	7 (2.6)	13 (4.6)
生活機能	0～10点	42 (15.7)	26 (9.2)
	11～12点	86 (32.1)	79 (27.8)
	13点	140 (52.2)	179 (63.0)

2. ペット飼育状況

表2には、性・年齢階級別のペット飼育状況を示してある。全体では、犬を飼っている者は69.6%、猫を飼っている者は39.7%であった。年齢階級別でみると、犬を飼っている者は男女とも年齢が高くなるにつれて多くなるのに対して、猫を飼っている者は男女とも年齢が高くなるにつれて少なくなっていた。男女別でみると、犬を飼っている者は女性に比べて男性で多く、猫を飼っている者は男性に比べて女性で多かった。犬と猫の両方を飼っている者は51人（男性28人、女性23人）であった。

表2 性・年齢階級別のペット飼育状況（複数回答）

		人数 (%)		
		犬	猫	その他
男性	60～64歳 (n= 97)	68 (70.1)	38 (39.2)	15 (15.5)
	65～69歳 (n= 89)	64 (71.9)	34 (38.2)	13 (14.6)
	70～74歳 (n= 82)	68 (82.9)	24 (29.3)	9 (11.0)
計 (n=268)		200 (74.6)	96 (35.8)	37 (13.8)
女性	60～64歳 (n=107)	64 (59.8)	52 (48.6)	10 (9.3)
	65～69歳 (n= 95)	59 (62.1)	45 (47.4)	3 (3.2)
	70～74歳 (n= 82)	61 (74.4)	26 (31.7)	1 (1.2)
計 (n=284)		184 (64.8)	123 (43.3)	14 (4.9)
全 体 (n=552)		384 (69.6)	219 (39.7)	51 (9.2)

表3には性・年齢階級別の最もかわいがっているペットの種類を示してある。全体では、犬が66.3%、猫が32.4%であった。性および年齢階級別の傾向は、前述のペット飼育状況とほぼ同じであった。犬と猫の両方を飼っている者で、犬を最もかわいがっていると回答した者は38人（男性24人、女性14人）、猫と回答した者は13人（男性4人、女性9人）であった。

ペットの平均飼育年数は、犬では7.3年（範囲は0～19年）、猫では7.8年（範囲は0～18年）であった。犬の飼育場所については59.1%が家の中で飼っていた。ペットの入手方法は、犬では人からもらった（50.3%）が最も多く、ペットショップなどで買った（37.9%）、拾ってきた（6.3%）の順であった。猫では人からもらった（37.7%）が最も多く、拾ってきた（39.4%）、飼っていたペットが産んだ（8.6%）の順であった。ペットを主に世話している人は、犬猫ともに回答者本人（犬63.3%、猫65.2%）が最も多く、配偶者（犬23.8%、猫21.9%）、子どもとその家族（犬9.9%、猫9.6%）の順であった。

表3 性・年齢階級別の最もかわいがっているペットの種類

		人数 (%)			
		犬	猫	その他	いない
男性	60～64歳 (n= 97)	67 (69.1)	30 (30.9)	—	—
	65～69歳 (n= 89)	62 (69.7)	25 (28.7)	1 (1.1)	1 (1.1)
	70～74歳 (n= 82)	65 (79.3)	16 (19.5)	—	1 (1.2)
計 (n=268)		194 (72.4)	71 (26.5)	1 (0.4)	2 (0.7)
女性	60～64歳 (n=107)	61 (57.0)	46 (43.0)	—	—
	65～69歳 (n= 95)	56 (58.9)	38 (40.0)	—	1 (1.1)
	70～74歳 (n= 82)	55 (67.1)	24 (29.3)	—	3 (3.7)
計 (n=284)		172 (60.6)	108 (38.0)	—	4 (1.4)
全 体 (n=552)		366 (66.3)	179 (32.4)	1 (0.2)	6 (1.1)

3. ペットとの情緒的一体感尺度の作成

尺度の内的整合性を検討するために、ペットとの情緒的一体感尺度を構成する6項目について上位・下位分析を行った。6項目の合計得点の平均は19.9点であったので、20点以上を上位群 ($n=311$)、20点未満を下位群 ($n=223$) とした。表4に示したように、すべての項目で上位群と下位群の間に有意差 ($p < .01$) が認められた。さらに、当該項目の得点と当該項目を除く合計得点との相関係数をみても、すべての項目で0.64以上の有意な相関 ($p < .01$) が認められた。したがって、これら6項目はいずれも高い弁別力を有するものと考えられた。

尺度を構成する6項目について、主成分分析法による因子分析を行ったところ、表5に示したように、分散の65.9%を説明できる単一因子が抽出され、因子負荷量はいずれの項目も0.74以上であった。

6項目で構成される尺度全体の信頼性をみてみると、 α 係数は0.895、前半と後半に折半した場合の等長スピアマン-ブラウン信頼性係数は0.880であり、項目数が少ないにもかかわらず、いずれも十分に高い値であった。尺度の併存的妥当性を検討するために、この尺度の合計得点とPAS日本語版との相関係数を算出したところ、0.763 ($p < .01$) というかなり高い値が得られた。

これらの結果から、6項目で構成されるペットとの情緒的一体感尺度は十分な信頼性と妥当性を有することが確認された。表6には、性・年齢階級別の平均得点を示してある。この尺度の得点範囲は6~24点で、全体の平均得点は19.9点であった。また、最もかわいがっているペットが犬の場合の平均得点は19.9点、猫は20.0点であり、既存のペットとの交流を評価する尺度でしばしばみられたペットの種類による差は、この尺度では認められなかった。

表4 ペットとの情緒的一体感尺度の項目分析

項目	平均値 (標準偏差)	項目 - 全体 相関 ^{a)}	上位・下位 分析 ^{b), c)}
Q1. ペットと何となく気持ちが通じる	3.43 (0.74)	0.648**	$t = 17.37^{**}$ $df = 296.35$
Q2. ペットと一緒にいると、ほっとする	3.40 (0.76)	0.761**	$t = 20.80^{**}$ $df = 297.98$
Q3. ペットは私を幸せな気分にしてくれる	3.36 (0.77)	0.774**	$t = 21.60^{**}$ $df = 320.39$
Q4. ペットは私のことをよく理解している	3.10 (0.86)	0.672**	$t = 17.83^{**}$ $df = 386.75$
Q5. ペットがそばにいないと、さびしいと感じる	3.28 (0.83)	0.705**	$t = 18.99^{**}$ $df = 356.77$
Q6. ペットは私を元気づけてくれる	3.31 (0.79)	0.756**	$t = 21.97^{**}$ $df = 341.86$

a) 当該項目の得点と当該項目を除く合計得点との相関である。

b) 上位群は合計得点が20点以上、下位群は20点未満であった。

c) Welchの検定法を用いた。

** $p < .01$

表5 ペットとの情緒的・一体感尺度の因子分析

項目	因子負荷量	共通性
Q3. ペットは私を幸せな気分にしてくれる	.858	.736
Q2. ペットと一緒にいると、ほっとする	.848	.719
Q6. ペットは私を元気づけてくれる	.840	.706
Q5. ペットがそばにいないと、さびしいと感じる	.802	.643
Q4. ペットは私のことをよく理解している	.770	.593
Q1. ペットと何となく気持ちが通じる	.747	.558
因子寄与率 (%)	65.9	

表6 性・年齢階級別のペットとの情緒的・一体感尺度の平均得点

(平均±標準偏差)

	男性	女性	全体
60～64歳	19.3±4.00 (97)	20.7±3.23 (105)	20.1±3.67 (202)
65～69歳	19.2±4.41 (85)	20.3±3.64 (91)	19.8±4.05 (176)
70～74歳	19.2±3.99 (80)	20.4±3.66 (76)	19.8±3.87 (156)
全体	19.3±4.12 (262)	21.5±3.48 (272)	19.9±3.85 (534)

() 内はサンプル数

4. ペットとの情緒的・一体感に関連する要因

重回帰分析の結果は表7に示したとおりであった。犬についてみると、有意な関連が認められた変数は、就学年数、生活機能、情緒的・一体感を感じる他者数、飼っているペットの数、ペットを主に世話している人、犬の飼育場所であった。すなわち、学歴の低い者、生活機能の高い者、情緒的・一体感を感じる他者数の多い者、飼っているペットの数の多い者、回答者本人がペットの主な世話役、犬を家の中で飼っている者でペットとの情緒的・一体感が強かった。猫についてみると、有意な関連が認められた変数は、飼っているペットの数とペットを主に世話している人だけであり、飼っているペットの数の多い者、回答者本人がペットの主な世話役でペットとの情緒的・一体感が強かった。関連要因に違いがあるという結果は、犬と猫とでは人との関係のあり方が異なることを示唆するものである。

5. ペットとの情緒的交流が精神的健康に及ぼす影響

精神的健康に関する重回帰分析の結果は表8に示すとおりであった。分析結果は、基本属性や社会関係、ペット飼育に関する変数の影響を統制したうえでも、ペットとの情緒的・一体感が抑うつ状態および孤独感と有意に関連することを示していた。すなわち、ペットとの情緒的・一体感が強い者ほど抑うつ状態が弱く、孤独感も弱いというものであった。

表7 ペットとの情緒的一体感に関連する要因

	犬 (n=329)		猫 (n=164)	
	β	r	β	r
性 (→男性)	.010	-.106	-.003	-.194*
年齢	-.020	-.056	-.063	-.019
就学年数	-.117*	-.072	.024	-.053
配偶者の有無 (→あり)	.012	-.059	.009	-.105
居住形態 (→一人暮らし)	.061	.106	.175	.185*
子どもの数	-.053	-.089	.018	-.101
現在職の有無 (→あり)	-.012	-.032	.005	-.085
生活機能	.125*	.150**	-.150	-.066
情緒的一体感を感じる他者数	.111*	.093	-.030	-.040
ペット飼育期間	-.012	.005	.025	.027
飼っているペットの数	.106*	.092	.186*	.152
ペットを主に世話している人 (→本人)	.151**	.161**	.279**	.292**
犬の飼育場所 (→家の中)	.254**	.235**	—	—
R	.377**		.389*	
R^2	.142		.151	

* $p < .05$ ** $p < .01$

表8 ペットとの情緒的一体感が精神的健康に及ぼす影響

	抑うつ状態 (n=504)		孤独感 (n=504)	
	β	r	β	r
性 (→男性)	-.068	-.116**	.122*	.092*
年齢	.040	.123**	.008	.090*
就学年数	-.042	-.130**	-.011	-.041
配偶者の有無 (→あり)	-.081	-.166**	-.079	-.105*
居住形態 (→一人暮らし)	.018	.080	.055	.069
子どもの数	-.052	-.032	-.005	-.008
現在職の有無 (→あり)	-.070	-.145**	-.036	-.064
生活機能	-.237**	-.272**	-.296**	-.347**
情緒的一体感を感じる他者数	-.122*	-.174**	-.140**	-.240**
手段的サポートの提供者数	.027	-.082	-.081	-.207**
ペットを主に世話している人 (→本人)	-.003	.006	.019	-.032
ペットとの情緒的一体感	-.090*	-.085	-.108**	-.132**
R	.369**		.440**	
R^2	.136		.194	

* $p < .05$ ** $p < .01$

考 察

本研究では、ペットを飼っている都市部の高齢者を対象に実施された調査データを用いて、ペットとの情緒的交流を測定する尺度を作成し、ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響を明らかにすることを目指した。

欧米では、人とペットとの関係を測定する尺度が開発されて研究に用いられている^{19~22)}。しかし、尺度の構成概念妥当性や信頼性についての検討が十分でないものもある。本研究では、人とペットとの関係性の中核をなすものとして、行動的な関わりではなく、ペットとの情緒的一体感を想定し、少数の項目で測定可能な「ペットとの情緒的一体感尺度 (Human-Animal Bonding Scale:HABS)」を作成した。この尺度を検討したところ、弁別力の高い単次元の項目で構成されており、信頼性も十分に高かった。また、既存の類似した尺度との関連から、構成概念妥当性も有することが確認された。これらの結果は、本研究で作成されたペットとの情緒的一体感尺度が人とペットの関係を適切に評価できることを示すものである。本研究では高齢者のデータを用いて尺度の作成を行ったが、項目内容をもて分かるように、この尺度の対象者は高齢者だけに限定されるものではない。今後は、他の年齢層のデータを用いて尺度の有効性を検討する作業が必要であろう。

ペットとの情緒的一体感に関連する要因は犬と猫ではかなり異なっていた。これらの結果は犬と猫では人との関係のあり方が異なるということだが、本研究の結果だけでは、その差異について十分に明らかにできない。今後は、関係のあり方についてペットの種類ごとに詳細に検討する必要がある。

ペットが高齢者の心身の健康に及ぼす影響について検討した研究では、必ずしも一致した知見が得られているわけではない。すなわち、身体的・生理的に、あるいは心理的に良い影響が認められるという知見^{6~8, 23)}があるのに対して、そのような影響がみられないという知見^{9, 10)}もある。精神的健康に関する本研究の結果は、ペットとの情緒的關係が親密な者ほど抑うつ状態や孤独感で示される精神的健康が良好であることを示していた。浅川²⁴⁾は高齢者のwell-beingにとっては、親密性に基づく関係を多く形成・維持していくことが必要であると報告している。このような指摘から考えると、本研究の知見は、人との関係だけでなく、ペットとの関係においても親密性に基づく関係を形成・維持することが高齢者の精神的健康に寄与することを意味しており、高齢者の生活の質を考えるうえで、ペットが重要な位置を占めることを示すものであろう。

本研究は、文部科学省科学研究費の補助（基盤研究（C）課題番号11610161）と財団法人日本火災福祉財団「平成10年度ジェロントロジー研究助成」を受けた。

本研究の実施にあたり、児玉好信先生（共立女子短期大学）、長田久雄先生（桜美林大学大学院）のご協力をいただきました。心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 加藤元：ペットでいやそここの病気。成美堂出版，東京（1999）。
- 2) 有馬もと：人はなぜ犬や猫を飼うのか。大月書店，東京（1996）。
- 3) Lawton MP, Moss M, Moles E: Pet ownership; A research note. *The Gerontologist*, **24**: 208-210 (1984).
- 4) Smith DWE, Seibert CS, Jackson FW, et al.: Pet ownership by elderly people; Two new issues.

- International Journal of Aging and Human Development*, **34**: 175-184 (1992).
- 5) Rogers J, Hart LA, Boltz RP: Role of pet dogs in casual conversations of elderly adults. *Journal of Social Psychology*, **133**: 265-277 (1993).
 - 6) Ory MG, Goldberg EL: Pet possession and well-being in elderly women. *Research on Aging*, **5**: 389-409 (1983).
 - 7) Lago D, Delaney M, Miller M, et al.: Companion animals, attitudes toward pets, and health outcomes among the elderly; A long-term follow-up. *Anthrozoös*, **3**: 25-34 (1989).
 - 8) Garrity TF, Stallones L, Marx MB, et al.: Pet ownership and attachment as supportive factors in the health of the elderly. *Anthrozoös*, **3**: 35-44 (1989).
 - 9) Akiyama H, Holtzman JM, Britz WE: Pet ownership and health status during bereavement. *Omega: Journal of Death and Dying*, **17**: 187-193 (1986).
 - 10) Miller M, Lago D: The well-being of older women: The importance of pet and human relations. *Anthrozoös*, **3**: 245-251 (1989).
 - 11) 安藤孝敏, 児玉好信: ペットが中高年の精神健康に及ぼす影響. どうぶつと人, **6**: 21-25 (1998).
 - 12) 古谷野亘, 柴田博, 中里克治ほか: 地域老人における活動能力の測定; 老研式活動能力指標の開発. 日本公衆衛生雑誌, **34**: 109-114 (1987).
 - 13) 浅川達人, 古谷野亘, 安藤孝敏ほか: 高齢者の社会関係の構造と量. 老年社会科学, **21**: 329-338 (1999).
 - 14) Templer DI, Salter CA, Dickey S, et al.: The construction of a pet attitude scale. *The Psychological Record*, **31**: 343-348 (1981).
 - 15) 諸井克英: 孤独感とペットに対する態度. 実験社会心理学研究, **24**: 93-103 (1984).
 - 16) Sheikh JI, Yesavage JA: Geriatric Depression Scale (GDS); Recent evidence and development of a shorter version. *Clinical Gerontology*, **5**: 165-172 (1986).
 - 17) 矢富直美: 日本老人における老人用抑うつスケール (GDS) 短縮版の因子構造と項目特性の検討. 老年社会科学, **16**: 29-36 (1994).
 - 18) 安藤孝敏, 長田久雄, 児玉好信: 孤独感尺度の作成と中高年における孤独感の関連要因. 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ (社会科学), **3**: 19-27 (2000).
 - 19) Stallones L, Marx MB, Garrity TF, et al.: Attachment to companion animals among older pet owners. *Anthrozoös*, **2**: 118-124 (1988).
 - 20) Lago D, Kafer R, Delaney M, et al.: Assessment of favorable attitudes toward pets; Development and preliminary validation of self-report pet relationship scale. *Anthrozoös*, **1**: 240-254 (1988).
 - 21) Poresky RH, Hendrix C, Mosier JE, et al.: The companion animal bonding scale; Internal reliability and construct validity. *Psychological Reports*, **60**: 743-746 (1987).
 - 22) Johnson TP, Garrity TF, Stallones L: Psychometric evaluation of the Lexington Attachment Pets Scale (LAPS). *Anthrozoös*, **5**: 160-175 (1992).
 - 23) Friedmann E, Katcher AH, Lynch JJ et al.: Animal companions and one-year survival of patients after discharge from a coronary care unit. *Public Health Reports*, **95**: 307-312 (1980).
 - 24) 浅川達人, 安藤孝敏: 高齢者の情緒的一体感に関する研究; 親密性を基に生起する関係と親密性によらない関係とは. 東海大学健康科学部紀要, **4**: 25-29 (1998).

Effects of emotional interaction with pets on well-being among the elderly

Takatoshi Ando

Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University

Importance of pets in old age has been gradually acknowledged. However, a few studies focusing on this issue have been conducted in Japan. The purpose of this study was to examine the effects of emotional interaction with pets on well-being among the elderly. Subjects were pet owners (dog and/or cat), ranging in age from 60 to 74 years, living in Metropolitan area. Mail surveys were carried out in 2000 and completed for 552 persons. The response rate was 92.0%. The demographics of pet ownership and quality of emotional interaction with pets (Human-Animal Bonding Scale) were inquired. Well-being was measured by the Japanese version of Geriatric Depression Scale and AOK Loneliness Scale. Multiple regression analyses showed the emotionally close relationships with pets had significant negative effects on depressive states and loneliness when the effects of socio-demographic variables, health status, and social support network were controlled. The results suggested the importance of emotionally close relationships with pets for quality of life in old age.

Key words: pets, human-animal bonding scale, well-being, elderly